

## 保育唱歌におけるフレーベル主義 —豊田英雄の文書を中心に—

東 ゆかり（初等教育学科・教授）

### I. はじめに

1877（明治10）年から1882（明治15）年にかけて100数曲作られた保育唱歌は、藤田（1978）によってその約1割が最後まで上申されなかったことが明らかにされた。<sup>1)</sup> 東京女子師範学校附属幼稚園開設時に日本で最初の保母となった豊田英雄（1845—1941）が作詞した「六球」の唱歌は、この上申日が明らかにされていない保育唱歌の一つである。この唱歌はフレーベルの第一恩物「六球」の唱歌であり、他の保育唱歌とは異なり、豊田が作成した9つの歌詞に対して9人の異なる伶人の作曲による9つの曲で構成されている。

筆者は、豊田が残した「六球」の唱歌の自筆文書の分析をおこない、この唱歌の歌詞が明治14年5月の皇后宮行啓で披露するために一旦は歌詞が定まり、その後何らかの理由で再び書き換えられ、その清書の一部が倉橋惣三に手渡されて『日本幼稚園史』に記載されるに至ったことを明らかにした。<sup>2)</sup> この倉橋が豊田邸を訪れ唱歌の綴りを受け取ったのは、昭和3年8月、豊田が84歳の年のことであった。<sup>3)</sup>

平成26年度は、豊田が「六球」の歌詞推敲過程を記した自筆文書の分析の結果を踏まえ、「六球」の作曲者である雅楽課伶人の写本、すなわち、芝祐泰『保育並ニ遊戯唱歌の撰譜』の芝祐夏筆「保育唱歌墨譜本」、そして豊喜秋筆保育唱歌写本（墨譜）の歌詞に焦点を当て、日本で最初のフレーベル式教育をおこなった東京女子師範学校附属幼稚園の保母が日々の保育のために作成したフレーベルの第一恩物を歌ったこの唱歌が、なぜ上申されずに終わったのかについての手がかりを探ることを目的として分析をおこなった。

### II. 「六球」の唱歌の作曲に携わった宮内省式部寮雅楽課伶人達について

「六球」の唱歌は、豊田が「六の球」「赤色」「黄色」「青色」「緑色」「柑色」「紫色」「元色」「間色」の9つの歌詞を作成し、その1曲ずつに異なる伶人が作曲をおこなった。この作曲に携わった伶人達の名前は、豊喜秋筆保育唱歌写本（墨譜）に記されており、そこには各伶人の名前と等級も記されている。なお、本研究では、各伶人の略歴についても述べる。

辻高節（つじたかまさ）（1841—1905）四等伶人

「六の球」を作曲。保育唱歌「学校往来」「唐琴ノ浦」「遊行」の作曲もおこなった。

奥好義（おくよしき）（1858—1933）四等伶人

「赤色」を作曲。保育唱歌「濱ノ眞砂」「王昭君」「君が代」の作曲もおこなった。

明治12年芝葛鎮らと共に、東京女子師範学校主席保母の松野クララからピアノ伝習を受ける。明治14年文部省御用掛となる。明治19年東京師範学校・音楽取調掛教授方囑託となる。

豊喜秋（ぶんのよしあき）（1848—1920）四等伶人

「黄色」を作曲。保育唱歌「兄弟ノ友愛」「隅田川」「山下水」「花見ノ駒」の作曲もおこなった。

多久随（おおのひさより）（1850—1924）四等伶人

「青色」を作曲。保育唱歌「墨縄」「桜をよめる」「苗代水」「明石ノ浦」の作曲もおこなった。明治16年文部省御用掛となる。明治19年音楽取調掛教授方嘱託となる。

多忠廉（おおのただきよ）（1845—1916）四等伶人

「緑色」を作曲。保育唱歌「若紫」「ヨロヅノコト」「ソムカヌミチ」「二見ノ浦」「兎」の作曲もおこなった。明治18年文部省御用掛となる。

奥好寿（おくよしなが）（1854—1922）五等伶人

「柑色」を作曲。保育唱歌「露ノ光」「宇治川」「野山ノ遊」「山家」「水底ノ月」の作曲もおこなった。明治18年東京師範学校御用掛となる。

豊時鄰（とよときちか）（1836—1909）五等伶人

「紫色」を作曲。保育唱歌「教ノ道」の作曲をおこなった。

辻則承（つじのりつぐ）（1856—1922）五等伶人

「元色」を作曲。保育唱歌「カヒアル千代」の作曲もおこなった。

明治14年文部省御用掛となる。明治19年音楽取調掛教授方嘱託となる。

東儀季長（とうぎすえおさ）（1856—1912）五等伶人

「間色」を作曲。保育唱歌「窮鼠」の作曲もおこなった。

### Ⅲ．芝祐泰翻字『保育並遊戯唱歌 歌詞』と豊喜秋筆保育唱歌墨譜（豊剛秋所蔵）「六球」の歌詞について

芝祐泰翻字『保育並遊戯唱歌 歌詞』は、江崎編『保育並二遊戯唱歌』に掲載されている芝家の写本である。芝祐泰は式部寮雅楽課伶人芝祐夏の息子であり、芝葛鎮と「赤色」の作曲者である奥好義は伯父にあたる。

また、この芝家写本と同じく、『保育並二遊戯唱歌』の中に含まれている『芝祐泰写 奥好義筆 保育並二遊戯唱歌譜 前後』の墨譜の中には、「六球」の唱歌そのものが記載されていない。奥好義の写本が書かれた時期は不明であるが、奥は「六球」の唱歌の「赤色」の作曲を担当した伶人であり、奥自身が作曲に携わったにも関わらず自ら記した墨譜に「六球」の唱歌を記載していない。

#### Ⅲ－1．芝祐泰翻字『保育並遊戯唱歌 歌詞』における「六球」の歌詞と豊田英雄自筆文書の比較

筆者の分析の結果、豊田英雄の6種類の自筆文書は、「柑色」「緑色」「紫色」「元色」「間色」について歌詞の変更はおこなわれなかったが、「赤色」「黄色」「青色」は何度も推敲された跡が残されていた。

##### Ⅲ－1－1．豊田英雄の「赤色」歌詞推敲過程

文書⑤ 幼稚園第一玩器六色球之唱歌

天に照る日月と星に象りて赤きをいろのはじめとハする

(天にアメと朱色でふりがなが付けてある)

文書② 六球歌下書き

天津日のいろにかたとり赤きをぞ色のあそびのはしめとハする

(右横に「(天津日)に象る球の赤きことハこれ也」と書かれている)

改正 六つのたまその一つの赤きをぞ紅染の濃染の色の赤きことは球の遊びのはじめとはする

六つ色のその一の赤きをぞ球のあそびのはしめとはする

文書④ 六球歌下書き

紅染めの濃そめの色の赤さをは球の遊びのはしめとハする

文書① 六球歌元改

元 天津日のいろにかたとり赤きをぞ球のあそびのはしめとハする

改 紅染めの濃染の色の赤さをは球の遊のはじめとはする

(「紅染め」「濃染め」の右横に「ベニゾメ」「コゾメ」とかなが振られている)

文書③ 遊戯草稿

元 天津日の色に象り赤きをそ球の遊のはしめとハする

改 (天津)のぼる日に象るいろの赤きをそ球のはじめとハする

(改の冒頭、「天津」を「のぼる」と朱色で書き換えている。また、改の上段に朱色で決定の○印が付けてある)

改 六つの色その一つの赤きをぞ球の遊のはしめとはする

文書⑥ 幼稚園唱歌七葉

のぼる日に象るいろのあかきをぞたまの遊びのはじめとハする

### Ⅲ－１－２．豊田英雄の「黄色」歌詞推敲過程

文書⑤ 幼稚園第一玩器六色球之唱歌

やま吹の色に似たるは人のすむ土に象る黄いろ成けり

文書② 六球歌下書き

やまふきの色はかたとり (と書きかけて行変えしている)

山吹のはなの色なる天まりにハあかきにつげる黄色なりけり

文書④ 六球歌下書き

山吹の花の色なる天まりはくちなし染めの黄色とハいう

黄金なる黄色の球は人のすむ土なりかたとるものところしれ

(上段に「六球法」「三形体」と書かれている)

文書① 六球歌元改

元 山ふきの色に似たるハ人のすむ土にかたとる黄色なりけり

改 山ふきの花の色なる天まりはくちなし染めの黄色とハいふ

(「まり」の右横に「球」と書き換え有)

文書③ 遊戯草稿

元 山ぶきの色ににたるハ人のすむ土に象る黄色成けり

改 黄金なる黄色の球は人のすむ土に象るものところしれ

(「黄金」にコカネとふりがな有)

改 山ふきの花の色なる天球は赤きにつげる黄色なりけり  
(改の上段に朱色で○が付けてある)

文書⑥ 幼稚園唱歌七葉

やまふきの花のいろなるそのたまはあかきにつげる黄色なりけり

### Ⅲ－１－３．豊田英雄の「青色」歌詞推敲過程

文書⑤ 幼稚園第一玩器六色球ノ唱歌

青色 あいをもて染なすものは大空の色の青きに象れるなり  
(ものところそしれの部分はみちけしになっている)

文書② 六球歌下書き

あふきそれハ天の(この行は後から書き足したもの)

大空の色と同じき天たまハ青ところそしれ。

(「(色と) 同じき」の右横に「として」、「天たまハ」の右横に「ものハ」と書かれている)

あふき色ハ(と書きかけたところで文章が終わっている)

文書④ 六球歌下書き

大空の色と同じき天たまはあいにて染めし青ところそしれ

(「天まり」の右横に「たま」と書き直している)

文書① 六球歌元改

元 菁をもて染めなすものハ大空の色の青さにかたとれるなり  
(藍と書こうとして菁と書いている)

改 大空の色と同じき天たまのあいにて染めし青ところそしれ

文書③ 遊戯草稿

元 藍をもて染めなすものハ大空の色の青さに象れるなり  
(冒頭、「菁」と「藍」の中間のような誤字になっている)

改 あふき見る天の大空の色としておなじきことのハ青ところそしれ  
(改の上段に朱色で○が付けてある)

文書⑥ 幼稚園唱歌七葉

青色 あふぎ見るその大空の色としもおなじきものハ青ところそしれ

### Ⅲ－１－４．芝祐泰翻字『保育並遊戯唱歌 歌詞』に記載されている「六球」の歌詞

六ノ球 六の球糸もて作り其の色は同じ数程有りところぞ知れ

赤色 天津日の色に象り赤き緒ぞ球の遊の初とはする

黄色 山吹の色に似たるは人の住む土に象どる黄色なりけり

青色 藍を以て染めなすものは大空の色を青きに象どれるなり

柑色 赤と黄と交ふる時は樺色のその美しき色と成るなり

緑色 黄と青と交へ染むれば常磐なる松の緑の色は出でにけり

紫色 赤と青と交へ染むれば縁なるその紫の色に出でにけり

元色 様々の色は有れども赤と黄と青こそ元つ色と云ふなり

間色 数々に色は多けど悉くその元色に因るところぞ知れ

芝祐泰翻字『保育並遊戯唱歌 歌詞』は、第一曲目「六ノ球」と「柑色」「緑色」「紫色」「元色」「間色」は、豊田英雄自筆文書⑥と同じ歌詞だが、「赤色」は文書①の元と文書③の元の歌詞、「黄色」は文書①の元と文書③の元、「青色」は文書①の元と文書③の元と同じ歌詞であった。

### Ⅲ－２．豊喜秋筆保育唱歌墨譜（豊剛秋所蔵）における「六球」の歌詞

豊剛秋氏所蔵の墨譜（豊剛秋氏所蔵）は、「黄色」の作曲者である四等伶人豊喜秋筆によるものである。この墨譜には、「六球」の唱歌の９名の伶人の名前、曲調と拍子が明記されており、この唱歌の第一曲目から第九曲目までの全てが「平調律旋」「拍子十」に統一されていることがわかる。１曲ごとに異なる伶人が作曲を担当したにも関わらず、調子と拍数を全ての曲でそろえている。

唱歌 豊田英雄詠 四等伶人辻高節撰譜 平調律旋

六ノ球 拍子十

ムツノタマ イトモテツクリ ソノイロハ オナジカズホド アリトコソシレ

唱歌 豊田英雄詠 四等伶人奥好義撰譜 平調律旋

赤色 拍子十（明治十四年五月十二日改正の傍ら書き有り）

アマツヒノ カタトルイロノ アカキヲゾ タマノアソビノ ハジメトハスル

唱歌 豊田英雄詠 四等伶人豊喜秋撰譜 平調律旋

黄色 拍子十（明治十四年五月十二日改正の傍ら書き有り）

ヤマブキノ ハナノイロナル ソノタマハ アカキニツケル キイロナリケリ

唱歌 豊田英雄詠 四等伶人多久随撰譜 平調律旋

青色 拍子十（明治十四年五月十二日改正の傍ら書き有り）

アオギミル ソノオホゾラノ イロトシモ オナシキモノハ アヲトコソシレ

唱歌 豊田英雄詠 五等伶人奥好壽撰譜 平調律旋

柑色 拍子十

アカトキト マジフルトキハ カバイロノ ソノウツクシキ イロトナルナリ

唱歌 豊田英雄詠 四等伶人多忠廉撰譜 平調律旋

緑色 拍子十

キトアヲト マジヘソムレバ トキハナル マツノミドリノ イロハイデニケリ

唱歌 豊田英雄詠 五等伶人豊時鄰撰譜 平調律旋

紫色 拍子十

アカトアヲト マジヘソムレバ ユカリナル ソノムラサキノ イロニイデニケリ

唱歌 豊田英雄詠 五等伶人辻則承撰譜 平調律

元色 拍子十

サマザマノ イロハアレドモ アカトキト アヲコソモトツ イロトイフナレ

唱歌 豊田英雄詠 五等伶人東儀季長撰譜 平調律旋

間色 拍子十

カズカズニ イロハオホケト コトゴトク ソノモトイロニ ヨルトコソシレ

第一曲目「六の球」の歌詞は豊田の自筆文書⑥と先の芝家文書と同じ歌詞である。また、「赤色」をのぞく全ての歌詞は豊田の文書⑥と同じ歌詞である。この豊家文書の「赤色」の歌詞は、豊田の文書③の改の歌詞で、しかも豊田自身が朱色で「のぼる日」と書き替えて「明治十四年五月本歌朱○ノように定マル」と記した「のぼる日」を用いず、修正前の「天津日」のままで書写されている。この豊家写本の墨譜には、朱書文字で「〔明治〕十四年五月十二日改正」と歌詞改正の日付が明記されている。

#### IV. 考察および今後の課題

豊田英雄が書いた「六球」の唱歌の6点の文書は、いずれも作成年月日が明記されていないが、③の文書の欄外に「明治十四年五月」の書き込みがある。そして、先の筆者の分析により、「明治14年5月24日の皇后行啓」の時期にこの「六球」の唱歌の歌詞の書き換え作業がおこなわれていたことが明らかとなった。

豊田が朱色で「のぼる日」と書き替えた時期が、豊喜秋が書写作业をおこなった後のことなのか、あるいは豊喜秋が書写の際に、豊田が修正した「のぼる日」を「天津日」に戻して書き記したのかのいずれかの可能性が推測されるが、その書き換え作業が何の目的でおこなわれたのかについて、平成27年度は更に分析を進めていく。

#### 〔注〕

<sup>1)</sup> 保育唱歌の作曲年月は、伶人から式部寮に曲が提出され受理された上申の日を示している。したがって、作曲年月不詳のものは上申されなかった唱歌として数えられている。

<sup>2)</sup> 東ゆかり2014 保育唱歌「六球」の歌詞推敲について－豊田英雄の自筆文書から－鎌倉女子大学紀要第21号 31-41.

<sup>3)</sup> 豊田英雄の曾孫の高橋清賀子氏は、倉橋が自宅を訪れた際、豊田が本棚から自筆の保育唱歌の綴りを取り出し上機嫌で唱歌を口ずさみ、その綴りの一つを倉橋に手渡したというエピソードを、豊田の孫で高橋氏の父親にあたる健彦氏から聞いていた。

#### 〔参考文献〕

芝祐泰編「保育並遊戯唱歌の撰譜」江崎公子編『音楽基礎研究文献集』第15巻 大空社 1991

藤田美美子「保育唱歌研究－フレーベル式幼稚園遊技移入の経過を中心として－」国立音楽大学創立五十周年記念論文集 1978 p.329-369

豊喜秋筆保育唱歌写本（墨譜）上野学園

塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』多賀出版 1996